争論

『生活』が先か、『平和』が先か

1. 暮らしに寄り添えきれなかった戦前・戦中の生協
　齋藤 嘉璋

2. 平和を求めて世界も動かしていた生協の反核運動
　岩垂　弘

今年は太平洋戦争の終結から70年目の節目であり、テレビや新聞などのメディアでも、戦前・戦中の様子や体験談が頻繁に報道されている。一方、国会では、集団的自衛権の行使容認や憲法改正に向けた議論が展開されており、平和や憲法について今一度考えるきっかけを与えられているように思う。

今回は、このような時勢もふまえ、戦前・戦中・戦後において、生協がどのように戦争や平和に向き合っていたのかについて一度じっくり考えてみることとした。戦前・戦中については、生協の歴史に精通されている元日本生協連常務理事の齋藤嘉璋氏にお話をうかがった。斎藤氏には、戦後12年目から生協に関わられ、戦前・戦中に実際に生協に関わっていた先輩方からのお話を通して、生協の歴史は戦争抜きに語れないこと、生協の婦人たちが平和を祈念していたこと、戦中の弾圧の中でも生き残った生協のことなど、生協とくらし、そして戦争との関係について語っていただいた。戦後については、元朝日新聞社社会部において長年生協の平和運動に関する取材を続けられてきた岩垂弘氏にお話をお願いした。そこでは、日本生協連が結成された背景に戦争の反省が踏まえられていること、生協組合員が立ち上がった反核運動によって世界をも動かしていたことが語られている。

日本生協連の創立宣言には、「平和と、よりよき生活こそ生活協同組合の理想であり、この理想の貫徹こそ、現段階においてわれわれに課せられた最大の使命である」とある。なぜ「平和」を先に置いているのか。これには、戦争を実際に体験した生協人からのメッセージが込められているという。

近年は、各生協における平和運動も停滞ぎみになっているが、事業にしても運動にしても、戦争体験者の想いを踏まえると、平和やくらしにおける生協の役割を少しでも見出すことができるのではないだろうか。東京のある生協では、毎年東京大空襲の日に、店舗でそれを知らせるアナウンスがあるという。たとえ小さな取組みであったとしても、組合員に考えるきっかけを提供し、くらしの中で平和の基盤を固めておくことで後世にも引き継ぐことができるのかもしれない。

（紗）